

タイトル	デイビッド・N・マイアーズ「ユダヤ教学のイデオロギー」(訳者解題と翻訳)
著者	佐藤, 貴史; SATO, Takashi
引用	北海学園大学人文論集(58): 95-119
発行日	2015-03-31

デイビッド・N・マイアーズ 「ユダヤ教学のイデオロギー」(訳者解題と翻訳)

佐藤 貴史

〔訳者解題〕

ここに訳出した論文は、David N. Myers “The Ideology of Wissenschaft des Judentums,” in *History of Jewish Philosophy*, edited by Daniel H. Frank and Oliver Leaman (London/New York: Routledge, 1997), 706-720 である。デイビッド・N・マイアーズはカリフォルニア大学ロサンゼルス校でユダヤ教史を教える教授であり、彼の主著としては *Re-inventing the Jewish Past: European Jewish Intellectuals and the Zionist Return to History* (Oxford University Press, 1995) や *Resisting History: Historicism and its Discontents in German-Jewish Thought* (Princeton University Press, 2003) をあげることができるだろう。上記の2つの著作からもわかるように、マイアーズの関心は〈歴史〉にあり、訳者はとくに *Resisting History: Historicism and its Discontents in German-Jewish Thought* から多くを学ぶことができた。

エルンスト・トレルチの大著『歴史主義とその諸問題』が解き明かしたように、近代のキリスト教神学は啓示の絶対的妥当性を掘り崩し、規範の相対化を招来しかねない歴史主義の問題に苦しめられてきた。実は同じ難問に20世紀のユダヤ人思想家たちも直面していたのである。マイアーズはトレルチ的な問題意識から当時のコンテクストを再構築し、そのなかにヘルマン・コーエン、フランツ・ローゼンツヴァイク、レオ・シュトラウス、イザーク・ブロイアーといったユダヤ人思想家を配置し、彼らがいかにして歴史に抗いながら (resisting history)、反歴史主義に染まっていったか

を明らかにした。このことを踏まえると、以下に訳出した論文「ユダヤ教学のイデオロギー」は、20世紀に歴史／歴史主義に抗ったユダヤ人思想家たちの前史を形成するものである。すなわち、近代世界のなかでみずからのユダヤの実存が不安にさらされ、キリスト教世界に向かってユダヤ教の意義を語らなければならなかった19世紀のユダヤ人思想家たちは、ドイツの学術世界の作法にしたがってユダヤ教を学問的、より正確に言えば歴史的に研究しようとした。しかし、批判的・歴史的方法によって精緻にユダヤ教を解明しようとするほど、皮肉にもユダヤ教と近代ユダヤ人のあいだに活きた霊的関係を回復することは困難になっていった。学問的方法では枯渇したユダヤ教の信仰を取り戻すことはできず、そこにはマックス・ヴェーバーが指摘した学問と生のディレンマが横たわっていたのである。キリスト教と同様にユダヤ教もまた、近代の隘路から逃れることは難しく、その状況を彼らなりの仕方でも克服しようとしたのが20世紀のユダヤ人思想家たちであった。その意味では、マイアーズの論文の最後に出てくる「ユダヤ教の歴史化」(historicization of Judaism)という事態こそ、19世紀のユダヤ教学運動における1つの帰結であったことがわかるだろう。何と引き換えに、ユダヤ教は歴史化され、文脈化されていったのか、そして何を新たに得ることできたのか。近代ユダヤ人の苦境は、この視点から論じられなければならないのである。

もう1つ、マイアーズの論文で興味深い点はユダヤ教学の誕生と展開がいくつかの組織との関係で論じられていることである。プレスラウのラビ神学校、ベルリンのユダヤ教学高等学院、ユダヤ教学アカデミー、そして正統派のラビ神学校といったユダヤ人の教育機関は、近代世界のなかでユダヤ教を忘却したユダヤ人がユダヤ教に(再)覚醒するために要請された組織だったはずである。しかし、果たしてその試みは本当に上手くいったのだろうか。言い換えれば、「学問」と「歴史」の強い影響下で創設されたユダヤ人の教育機関は、ユダヤ教にふたたび新しい息吹を吹き込むことに成功したのだろうか。この問題については、David N. Myers, “The Fall and Rise of Jewish Historicism: The Evolution of the Akademie für die

Wissenschaft des Judentums (1919-1934),” *Hebrew Union College Annual*, Vol. 63, 1992 も参照されたい。また訳者の論文 [「ユダヤ・ルネサンスの行方, ローゼンツヴァイクの挫折 — 20 世紀ユダヤ思想史における近代批判の諸相」『思想』第 1045 号, 岩波書店, 2011 年 5 月] や著書 [『ドイツ・ユダヤ思想の光芒』岩波書店, 2015 年出版予定) のなかでもマイアーズの問題意識を共有しながら, 20 世紀ドイツ・ユダヤ思想史の諸問題が論じられている。参照いただければ幸いである。

19 世紀ドイツにおけるユダヤ教学の成立と展開は, 近代ドイツ・ユダヤ思想史研究の最重要課題と言っても過言ではない。しかし, わが国でこの辺りの本格的な研究は手島勲矢の仕事を別とすれば, ほとんど見当たらないのが現状である。その意味でも, 要点をおさえながら, 手際よくまとめられたマイアーズの論文は有益であると思い, ここに訳出した次第である。なお Wissenschaft des Judentums を「ユダヤ教学」と訳すべきか, それとも「ユダヤ学」と訳すべきかは最後まで悩んだが, ここでは「ユダヤ教学」という訳語を選ぶことにした。その他にも気になる個所は多々あるが, まずは歟を入れることが大事だと考えた。わが国の近代ドイツ・ユダヤ思想史研究に少しでも貢献できるならば, それは訳者にとって望外の喜びである。

〔翻 訳〕

ユダヤ教学のイデオロギー

デイビッド・N・マイアーズ

大学で訓練を積んだ専門的な歴史家たちの最初のサークル, すなわちユダヤ人文化学術協会 (Verein für Cultur und Wissenschaft der Juden) のメンバーたちは歴史におけるもっとも不安な瞬間に集合した。ナポレオンの敗北とウィーン会議に続いて, 19 世紀の [最初の] 20 年間で, 強力な保

守的傾向がプロイセンとドイツにおける他の諸州を席卷した。このような反動の人目に付きやすい攻撃目標のなかにユダヤ人がいた。ユダヤ人たちは1812年に部分的に解放されたが、彼らの全体的「解放」への要求は社会における民衆とエリート層のなかに敵対心と憤慨を生み出した。反ユダヤ主義の爆発は有名な知識人や学者たちの口から流れ出たのであり、そのなかの幾人かは大学の講堂で若きユダヤ人学者たちを教えていた¹。このような人物たちの鋭い論争はさらに暴力的な表現、すなわちユダヤ人たちに向けて最初はバイエルンで勃発し、それからドイツ中に広がった1819年のヘップ・ヘップ暴動 (the Hep! Hep! riots) の背景としての役割を担った。

ヘップ・ヘップ暴動は、ドイツ・ユダヤ人が持ちはじめていた安心と信頼の当初の感覚を掘り崩した。しかし、このようなドイツ・ユダヤ人の世代が感じた不安は、物理的暴力の脅威あるいは軽率なレトリックによってのみ煽られたのではなかった。おそらくより困難だったことは、次のような深い実存的懸念である。ユダヤ人とユダヤ教は近代という時代のなかで果たすべき意味のある役割を持っているのだろうか。さらに言えば、もはや必ずしも宗教的違いがある集団を別の集団から区別するための機能を果たさないポスト啓蒙の世界のなかで、ユダヤ人たちは彼らが今後も存在していくうえで別々の集合体にとどまることを、十分に説得力があり合理的なことだと思うだろうか。

このような問いが、1819年11月に最初にベルリンに集まったユダヤ人文化学術協会の中心にあった。協会の創設メンバーの1人であるJ・A・リスト (J. A. List) は容赦なく、そして率直に次のように問うた。「尊敬を

¹ ユダヤ教学の創設者であるレオポルト・ツンツは、ベルリン大学において指導的な反ユダヤ主義的公法学者フリードリヒ・リュースに少しのあいだ師事し歴史を研究した。1学期が過ぎたのち、ツンツはリュースが「ユダヤ人に対する批判を書いた」という理由で、彼に師事することをやめる決意をした。ツンツの回想は Meyer 1967, p. 158 で引用されている。

払うこともなく、そのためにわたしがこんなにたくさん苦しんでいることに、なぜ頑迷に固執するのか」(Ucko 1967, p. 326)。事実、近代ユダヤ人の初期世代は、すでにこの問いを提起しはじめていた²。ユダヤ人の有意性と適応力をめぐる議論は、18世紀後半におけるドイツ啓蒙主義の言説と論争を活発なものとした。この議論をきっかけとして、同世紀における指導的なドイツ・ユダヤの知的人物であったモーゼス・メンデルスゾーン(Moses Mendelssohn)は、ユダヤ教に関する彼の有名な論評にして主張である『エルサレム』(*Jerusalem*)を1783年に生み出したのであった。後続の世代はユダヤ教への忠誠と哲学的開放性、儀式的順守とラビの権威に対する規範に背くような批判のあいだにある、壊れやすいが模範的なメンデルスゾーンのバランスを釣り合わせることは難しいと思った。彼自身の子どもたちだけではなく、ベルリンのユダヤ啓蒙サークルにおける彼の弟子たちも、メンデルスゾーンとはまったく異なる仕方では——たとえば、ユダヤ教の宗教儀式の改革を要求することで、あるいはより根本的にキリスト教へ改宗することで——ユダヤ教の妥当性という問いに応じた。ポスト・メンデルスゾーン世代は、ますますはっきりと啓蒙の社会契約という用語を理解した。すなわち、市民としての社会的受容と諸権利を得るために、ユダヤ人たちはその共同的・宗教的絆を弱め、ときには捨て去ることさえしなければならなかったのである。ユダヤ人の政治的諸権利や社会的向上心に対して新しい敵対的な検査がなされたポスト・ナポレオンの反動の時代のなかで、なおいっそうこの交換における問題含みの特徴があらわれ

² 肉体的であろうと、精神的であろうと、ユダヤ人として生き延びることに対する不安は、近代に生まれた新しい事柄ということではほとんどない。追放という破壊的な(諸)経験——第1神殿と第2神殿の崩壊に続いて、スペインからの排除(ある種の2重の追放)——は、ユダヤの人々が存在し続けるという可能性に対する深い不安を生み出した。それぞれの世代において、不安は(バビロニア・ユダヤ教、ラビ制度や教義、ルリアのカバラなどのような)ユダヤ教の創造的な再形成をもたらした。

ることになった。

このような不吉な時期に協会の創設メンバーは議論すべき事柄を提案したが、その方向性と規模は当時の他のユダヤ人が示したものとはまったく異なっていた。批判的学識が持っている解明力を通して、彼らはユダヤ教・ユダヤ人の過去に関する広範囲に及ぶ文学的・歴史的記述を生み出そうと願った。その記述は、ユダヤ教・ユダヤ人の過去の輪郭をはっきりとさせることにだけ役立ったのではないだろう。それはまた、現在におけるユダヤ教の機能と有意性のより鮮明なイメージをもたらしただろうかもしれない。

実際、そのような記述を提示しようとする責務は、協会が創立される少し前に、レオポルト・ツンツ (Leopold Zunz) という名の若きユダヤ人学者によってはじめてはっきりと述べられたのである。デトモルトにおける伝統的なユダヤ人家庭に生まれたツンツは、ドイツ・ユダヤ人が 19 世紀初頭に経験していた驚くべき変化の速度を反映していた。10 歳になるまで、彼はドイツ語で書かれた本を読むこともなかったし、持ってもいなかった。しかし、次の 10 年のあいだに、ツンツは啓蒙主義に熱中した人々が運営していたユダヤ系の小学校を卒業し、最初のユダヤ人として地元の中等学校への入学が認められ、それからベルリンに移り、そこで新たに開設された大学で研究に従事しようとした (Schorsch 1977, pp. 109ff.)。熱心な知的探究に取り組んでいたユダヤ人グループと彼が出会ったのはベルリンにおいてであった。当初、このグループは自分たちを学術サークル (Wissenschaftszirkel) と呼んでおり、とくにユダヤ教に関する事柄に専念してはいなかった。しかし、数年後、同じ構成員から成るグループがユダヤ教に関する学問的な主題を追及するための明確なプログラムを持ったユダヤ人文化学術協会として再編成された。

初期のグループと後のグループを結びつける概念的 (で言語的) 糸は学問 (Wissenschaft) であり、それは科学的研究と全方位的な調査範囲の両方を含んでいた。協会が創設される以前でさえ、レオポルト・ツンツはドイツの知的生活のどこにでもあらわれるような、この概念はユダヤ教・ユダヤ人の過去の研究にどのようにして応用できるかをはっきりと示そうと

した。1818年5月、彼は「ラビ文学についてのこと」(Etwas über die rabbinische Literatur)を出版した。そこで彼は、かなり詳細に「われわれの学問」(unsere Wissenschaft)の使命の輪郭を描いた。しかし、ツンツがこのエッセイのなかで説明したように、「われわれの学問」はラビ文学の包括的な調査を含まなければならない(Zunz 1875, p. 1)。しかし、ツンツにとってラビ文学はラビの知識の古典的源泉——ミシュナー、タルムード、ハラハーの法規や注釈に限られなかった。それはまた歴史、神学、哲学、修辞学、法学、自然科学、数学、詩、そして音楽における諸々の著作——さらに言えば、聖書時代から近代にまでおよぶ十分な範囲のヘブライ語での文化的表現物を含んでいた。

この広大なヘブライ語での文学的遺産の体系的研究に着手すべきときが到来したと、ツンツは信じていた。彼が生まれたドイツのユダヤ人たちはもはや容易にヘブライ語を読むこともなかったし、精神的あるいは知的着想のために誠実にヘブライ語原典に向かうこともなかった。ドイツ文化と自己の洗練化の追求を具体化しようとする教養(Bildung)と比べると、彼らの文化的枠組みはそれほどタルムードに関わる高度な技法から影響を受けてはいなかったのである。このような変り目に、ツンツはほんのわずかな感傷的な言動とともに「すでに封印されているものの記述を要求することに足を踏み入れる」学問を見た。ラビ(すなわち、ヘブライ語)文学における「新しく意義深い発展」は少しも期待することはできなかった。正典は閉じられてしまっている(Mendes-Flohr and Reinhartz 1980, p. 197)。ツンツの晩年の生活に見られたユーモアあるエピソードはこのような信念を裏づけているように思える。かつてベルリンを訪れた著名なロシア・ユダヤ人はツンツを訪問し、みずからをヘブライ語詩人として紹介した。ツンツはたじろぎ、不信の念を持ちながら次のように尋ねたと言われている。「あなたが生きていたのはいつですか」(Stanislawski 1988, p. 123)。

このような逸話がヘブライ語文学は本質的に歴史的遺物であるというツンツの信念を正確に反映しているとしたら、ヘブライ語文学についての学問的研究を続けていくための彼の動機とは何だったのだろうか。それは時

代遅れではあるけれども、古代文明を再構築しようとする考古学者の試みだったのか。1818年の綱領的エッセイのなかで、ツンツは彼の研究結果のどんな現在の応用も排除しているように見える、距離を取った様子と学問の厳密さへの関心を何度も明らかにした。しかし、彼のエッセイのなかではツンツが別の感傷的な言動をあらわすときもある。彼がさまざまなグループ——第1に学問の批判的方法を神の冒涇とみなす伝統を厳守するユダヤ人たち、第2にどんな過去の学問的研究のうちにもまったく価値を見出さない世俗的ユダヤ人や他の者たち、第3に自分たち自身の宗教的伝統の正しさを確認するために古典的なユダヤ教の原典を研究し、歪めてしまったキリスト教の学者たち——によるユダヤ教の文学と文化史の軽視を議論するときには、彼の口調は情熱的になり扇動的にさえなった(Mendes-Flohr and Reinhartz 1980, pp. 197-201)。

それにもかかわらず、ユダヤ文学の過去を無能なあるいは敵対する者たちの手から救おうとする衝動は、ツンツを動機づけているほんの一部分にすぎなかった。より深い着想の痕跡はまさに、ツンツがみずからの仕事を明示するために用いた「われわれの学問」という明確な表現のうちにある。一見して、このフレーズは撞着語法のように思える。なぜなら学問とは、主観と客観のあいだに明確な境界設定を要求する科学的妥当性の基準を含意しているからである。

しかし、もう一度見てみると、この外見上は反語的なフレーズは19世紀初頭からはじまるドイツにおけるユダヤの学識にとって役立ち、広がりつつある特質の存在を強調している。1818年の彼の重要な綱領的エッセイのなかで、ツンツは「ユダヤ人の運命の複雑な問題は、ほんの一部ではあるが、1つの解決策をこの学問から引き出すかもしれない」と慎重な楽観主義とともに述べた(Mendes-Flohr and Reinhartz 1980, p. 197)。言い換えれば、学問はこのような不安の時代のなかでユダヤ人たちの立場を改善することに役立ちえたのである。さらに溢れんばかりの特徴づけが、35年後にザカリアス・フランケル(Zacharias Frankel)という学者からあらわれた。彼は、学問を「それを通して血液がすべての血管へと流れてゆくユダ

ヤ教の心臓」として描いた (Brann 1904, Appendix 1)³。世紀半ばにおけるツンツからフランケルの時代にいたるまで、学問はそのなかでユダヤ教が定義されなければならなかったような言説の領域として登場した。それどころか、「使い古したものと有用なもの、時代遅れのものと有害なもの、そして新しいものと望ましいもののあいだを区別」できるのが学問だったと、ツンツは主張した (Mendes-Flohr and Reinhartz 1980, p. 197)。

最初からユダヤ教学 (Wissenschaft des Judentums) は、相対立する衝動と影響力の交差点を示していた。ヘブライ語文学の正典を確定しようとする明確な願望は、まずはユダヤ教に新しい活力を与えるという暗黙的な目的との緊張のなかにあった。これらの両立しない衝動は分裂した協会の個性を生み出し、またそのメンバーは苛立ちながら知的・実存的な交差点に接近しようとする世代に連なっていた。協会のメンバーは、所詮、ユダヤ教はヨーロッパ文明の生き活きとした構成要素であった——そして、そのように認められなければならないということを固く信じた啓蒙主義の子どもたちだったのである (Ucko 1967, p. 320)。しかし、啓蒙主義から影響を受けた彼らのエキュメニズム (と結果的に生じる弁明) は、協会の学者たちを消滅させたわけではなかった。年代的かつ気質的に見て、彼らは明確にロマン主義的な時代のなかに位置づけられた。J・G・ヘルダーや J・フィヒテといった人物の例から影響を受けた非ユダヤ系の同時代人たちは、ドイツの民族精神の本質を把握しようと努力した。このような独自の民族精神の追求は、歴史主義 (historicism) すなわち個々の歴史的有機体のダイナミックな展開を強調した観点を通じて深みを得た。協会を創設した「啓蒙主義の子どもたち」は、ロマン主義的な歴史主義が根を下ろしつつあったような知的時代から生まれた。より広い環境から生じる印象を反映しながら、ある者たちはユダヤ民族の独特な内的精神と文化的遺産を明確にする必要性について語った (Ucko 1967, p. 328)。彼らは、あるいは

³ Brann 1904, p. i の補遺 1 におけるフランケルの主張を参照されたい。

一般的にドイツ・ユダヤ人たちはユダヤ人の独立した国民国家に関する早咲きの支持者だったというのではない。政治的に考えると、彼らはドイツへの忠誠を告白し続けたのである。また思想的には、協会のメンバーはヨーロッパ社会にぴったりと適合したユダヤ文化を心に描いていたのである(Meyer 1967, p. 165)。

しかし、ロマン主義の痕跡は明らかに目に見えるものとなった。ユダヤ教学に対する厳しい批判者であるゲルショム・ショーレム (Gershom Scholem)でさえ、賞賛することには気が進まないものの、次のことに注目した。すなわち、レオポルト・ツンツの1818年の綱領的声明は「過去への新しい態度、それ自体における過去の壮麗さと栄光の祝福、新しい光のなかでの原典の評価……そして、何よりもまず——民衆や民族の研究への転換」⁴を明らかにした。

ツンツは、とくにユダヤ民族における過去の文学を研究することに専念した。なぜならその過去は「時代を通じたその〔すなわち民族の〕文化の推移に関する包括的な知識への入り口」としての役割を果たすことができたからである (Mendes-Flohr and Reinhartz 1980, p. 198)。ここで注目すべき点は、全体論の追求、すなわち歴史的・文化的有機体に関する包括的知識の追求である。このような追求は、19世紀初頭のドイツで支配的であった学問概念のまさに特徴であった。1820年の百科事典の項目は、学問を「単なる総計とは大きく異なり、体系的に全体へと結びつけられた知識の具象化」と定義した (*Allgemeine deutsche Real-Encyclopaedie* 1820, p. 761)。

事実、全体論への切望は近代ドイツ思想のなかに豊かな起源を持っており、それはイマヌエル・カントの『判断力批判』に初期の重要な定式化を

⁴ これらの典型的なロマン主義的特徴を指摘する一方で、ショーレムは1944年に次のように主張した。ツンツのプログラムは最終的に失敗した。それは同化主義者と弁証学の世代の所産であり、「ユダヤ民族の構築」には十分に向けられてはいなかった。Scholem 1979, p. 156 を参照されたい。

見た。後にヘルダーやフィヒテの著作において、全体論の追求は有機的な民族精神を突き止めようとするロマン主義的な使命と密接に結びつくこととなった。19世紀の20年代には、絶対精神によって命を吹き込まれた全体性の理念はG・W・F・ヘーゲルの領土になっていた。この時代に、ヘーゲルの影響力は急速にドイツの学問世界のいたるところに拡大していき、それは協会のようなユダヤ人の知的サークルに達した。協会を背後で支えた優秀な若き法制史家にして指導的な力の持ち主であったエドゥアルト・ガンス (Eduard Gans) は、彼の作品のなかでヘーゲルの学問概念に根拠を与えた「深く固定された大建造物の単一にして壮大な建築術」を再現しようとした⁵。ヘーゲルの確かな弟子として、ガンスもまた歴史的弁証法という主人のモデルを近年のユダヤ史に適用しようとした。それゆえ、ガンスにとってユダヤ的啓蒙 (ハスカラ) は、その活発な理想が失われてしまっていた伝統的ユダヤ教への正反対からの応答であった。しかし、それ自体としてある正反対の過剰さのなかで、ハスカラは「その空虚な抽象概念に別の内実を与えようと苦心することもなく、伝統的なものに対する嘲笑と軽蔑」を示しただけであった (Meyer 1967, p. 167)。このようなハスカラのアンチテーゼに対する批判を提示したにもかかわらず、ガンスは総合的な応答を示さなかった。なぜならかなりの部分、彼はユダヤ教が精神的活力を欠いていたというヘーゲル自身の直観を共有していたように見えたからである。

興味深いことに、ユダヤ教に対するもっとも記憶に残っているガンスの墓碑銘もまた近代におけるユダヤの実存のもっとも謎めいた指示内容の1つである。1822年、協会のメンバーに対する講演のなかで、ガンスは困惑

⁵ ガンスは、この願望を次のヘーゲルの著作のために書かれた序文のなかで認めた。G. W. F. Hegel, *Grundlinien der Philosophie des Rechts, oder Naturrecht und Staatswissenschaft im Grundrisse* (Berlin, 1840), p. vi. これは Reissner 1965, p. 59 で引用されている。より全般的なヘーゲルの影響については、Wallach 1959, pp. 10-16 を参照されたい。

を招くメタファーを通して、次のような希望を表現した。すなわち、ユダヤ人は「川の流れが大洋のなかで生き続けるように生きている」(Mendes-Flohr and Reinhartz 1980, p. 192)。もし後の彼の人生行路を具体例として見るならば、このような隠された主張は完全な社会的・文化的統合への要求として読まれるべきである。というのも、ユダヤ人文化学術協会の会長を務めた後のわずか数年後に、ガンズは統合の最終的な道を選んだからである。1825年、彼はプロテスタントに改宗し、それによってドイツにおける正教授の職への主たる障害を克服したのである。

ヘーゲルに関するもっとも肯定的なユダヤ的適応は、1822年に「ユダヤ教学の概念について」(über den Begriff einer Wissenschaft des Judentums)というエッセイを書いた協会の別のメンバーであるイマヌエル・ヴォルフ(Immanuel Wolf)からもたらされた。ツンツの1818年の宣言と一緒に、ヴォルフのエッセイは初期のユダヤ教学のための知的土台を提示した。両者は学問の長所を激賞したという事実があるにもかかわらず、2つの綱領的声明を著した者たちには共通点がほとんどなかった。ツンツは、近代のユダヤ教に関する学識を創設した父の1人とみなされるにいたった注意深くしつかりとした方法を持った学者であった。彼は一時的にベルリンでヘーゲルのもとで研究したにもかかわらず、ヘーゲル的目的論を慎重に避け、より日常的で経験的な方法を支持した。それどころか、彼を形成した学問的訓練は哲学ではなく、むしろベルリンにおけるアウグスト・ベーク(August Boeckh)やF・A・ヴォルフ(F. A. Wolf)のもとの古典文献学のなかではじまったのである。

対照的に、彼についてほとんど知られていない事実によれば、イマヌエル・ヴォルフはわずかな訓練と技術しか持たない人であった。彼の学問的キャリアは実質的には1822年のエッセイにはじまり、それで終わったのである。いまなお、そのエッセイはヴォルフの生涯を越える重要性を持っている。第1に、それはヘーゲルの枠組みと語彙を協会というサークルが受け入れたことの証拠となっている。当時のドイツの知的サークルにおいて本当にどこでも見られた全体論の追及は、いたるところで明確になった。

ユダヤ教学は「その全範囲において対象の体系的展開と描写」(Wolf 1822, p. 17)を獲得しなければならないと、ヴォルフは宣言した。描写されるべき対象はユダヤ教であり、その統制的理念は神の統一性であった。ヴォルフはヘーゲルの弁証法の道具を借りてきたが、それはこのような壮大な理念が活気に満ちた霊的力として存続するために国家という具体的形式と戦い、最終的にそれを超えたということを論じるためであった。いまや、このような壮大な理念を理解することが学問の課題であった。

ヘーゲルの観念論への没頭にくわえて、ヴォルフのエッセイは近代のユダヤ教に関する学識を構成するものとして、最初に言及された相対立する衝動を掘り出すために重要なものであった。一方で、ヴォルフは「その狙いは真理であるがゆえに、下劣な生活が持っている党派心、情念、そして偏見をただ超えているということだけ」が学識を発展させるのに必要であると信じていた (Wolf 1822, p. 23)。他方で、彼は学問を「われわれの時代の特徴的な態度」、すなわちユダヤ人がみずから自身を近代という時代に適合させるために身に着けなければならない方法や言語とみなした。学問は純粹に科学的であると同時に手段的であり、批判的方法であると同時に自己規定の媒介物であった。これらの重なり合う一連の機能は近代のユダヤの実存を基礎づけている、より大きな切望の組み合わせ、すなわち非ユダヤ的基準に訴えることで知的(そして専門的)妥当性を得たいとする願望と、伝統的ユダヤ教の概観を完全に破壊することなしに、それを再形成したいとする願望から発していた。

イマヌエル・ヴォルフのテキストはこれら2つの価値のもっとも初期の、そしてもっとも明確な結合の1つであるにもかかわらず、それはほとんど唯一のテキストだというのではない。科学としての学問、またアイデンティティを形成する源泉としての学問という両極はヴォルフとツンツの世代にとって境界線の目印としての役割を果たし、その後のユダヤ人学者のあらゆる世代にとってそうあり続けてきた。このことを踏まえると、その両極のあいだを媒介し、そのあいだにある根本的な緊張を認め、そして純粹な学問への神聖な主張を掘り崩すことをユダヤ人学者が断固としてよしとし

ないということがわかったことに、ひとは驚いた。しかし、緊張に関するどんな承認でも、それを制止するには、科学的客観性の指導的レトリックは強力すぎた。それどころか、緊張の承認は偏見の承認をもたらしたかもしれない⁶。そして、ユダヤ人学者たちにとって、そのような承認の代償は払うにはあまりに高すぎたのであった。

なぜその代償はあまりに高いものと理解されてしまったのか。たしかに、その答えの一部は制度的権力の問題のなかにある。同時代の非ユダヤ人学者たちとは異なり、ドイツ・ユダヤ人研究者たちは国家が後押ししている大学システムのなかに特権的な地位を必死に切望したが、それを獲得することはけっしてなかった。彼らは教授の職を提供されなかったし、彼らの研究分野は大学のカリキュラムに導入されることもなかった。ドイツの大学システムに受け入れられることを欠いていたにもかかわらず、ユダヤ人学者たちはドイツ的（そして異教的）妥当性という最終的基準、すなわち学問への彼らの忠誠に迷いが生じることはめったになかった。彼らにとって、学問は学問的方法を越えたものであった。また、学問はそれを通して社会的・知的受容を達成できる権力の手段であった。このような手段の有用性あるいは性質を疑うことは、ユダヤ教を再形成するための能力を減少させること、それゆえ、ドイツ社会への完全な入場を塞いでしまうことであった。

ドイツ・ユダヤ人学者たちと制度的権力の関係は、19世紀のさらに広いドイツ・ユダヤ人共同体の立場を反映していた。当初、解放の約束に勇気づけられたものの、ドイツ・ユダヤ人たちはすぐに彼らの道にある公式・非公式の障害物に直面した。彼らの応答は見境のない自己否定ではなく、むしろ周囲の異教社会と並んだアイデンティティや共同的組織の構築であった。デイビッド・ソーキンが説得力を持って論じたように、18世紀後

⁶ ハンス＝ゲオルク・ガダマーは「われわれは理解を」、とくに歴史的理解を「規定している先入見を意識的な水準へと高めなければならない」と論じている。Gadamer 1979, p. 156.

半からユダヤ人たちは、彼らの集団的アイデンティティの主要な保管場所としての役割を果たしたユダヤ的「^{サブカルチャー}下位文化」を形成した。このような下位文化は制限された公共圏を提示し、そこでユダヤ人たちは彼らが周囲の非ユダヤ的社会のなかで排除されていた活動に従事できたのである (Sor-kin 1988, pp. 5-6)。

学識の領域は、このような構造的で心理学的なメカニズムに関する啓発的な事例を示している。ドイツの大学で訓練を受けたが、そこで教えることを妨げられていたユダヤ人学者たちは専門や知性の周縁化に直面した。ユダヤ教学の最初の段階において、協会の設立からはじめながら、ユダヤ人学者たちは自分たちの研究のための制度的支援がないなかで活動していた。たとえば、40歳代をレオポルト・ツンツは学校を掛け持ちながら生活を送り、安定し満足のいく仕事を見つけることはできなかった。彼が就くことのできたもっとも保証された仕事は、約12年間のあいだ、ベルリンにおけるユダヤ人教師のための学校の校長としての仕事であった。同様に、ツンツの子ども時代の友人にして級友であったI・M・ヨストはフランクフルトにおけるさまざまな高等学校の教師や校長として生計を立てた。たとえ研究のための安定した雇用や援助がなくても、ツンツとヨストはその経歴の最初において不朽の学問の仕事をはじめたのである。ツンツは、ユダヤ教の説教学の歴史に関する一流の研究『ユダヤ人の礼拝における朗誦』(*Die gottesdienstliche Vorträge der Juden*)を生み出した。そのあいだに、ヨストは1820年から1828年にかけて9巻から成るユダヤ人の歴史『イスラエル人の歴史』(*Geschichte der Israeliten*)を出版した。これらの作品は「種々の適切な準備作業」、すなわち「数百年、さらには数千年の文献を記述するための責任を担っている」包括的な総合に対するツンツの綱領的な要求を満たすのに大いに役立った (Mendes-Flohr and Reinhartz 1980, pp. 197-8)。しかし、それらはドイツの大学からの財政的あるいは制度的支援の見通しに頼ることもなかったし、それを急がせることもなかった。その代りに、この時代のユダヤ人学者たちは穏やかな無視あるいは意図的に邪魔されることによってドイツの学術文化の周辺へと押し出されてしまっ

たのである。

ひとは英雄的だと言うかもしれないが、このユダヤ教学の最初の局面を完成させたものは1854年のプレスラウにおける近代的なラビ神学校の創設であった。プレスラウの神学校の開設は、ドイツにおける専門化された近代的なラビ職に対して増え続ける要求に取り組んだだけではなかった。それはまた、ユダヤ的学識のための制度的支援の新しい時代を開いた。数十年後、他の2つの神学校、ユダヤ教学高等学院(The Hochschule für die Wissenschaft des Judentums)と正統派のラビ神学校がベルリンに開校された。それらもまた、ユダヤ的学識の研究と教授の中心地として登場した。それにもかかわらず、このような制度化のプロセスに関するいくつかのアイロニーは入念な考察を必要とする。第1に、神学校は批判的研究のための新しい拠点をまさに提示したけれども、それは有能で大学で訓練を積んだユダヤ人学者が集まる場所にいる、ほんのわずかの者しか雇うことができなかった。さらにレオポルト・ツンツや書誌学者モーリツ・シュタインシュナイダー(Moritz Steinschneider)のような、その時代のもっとも優れたユダヤ人学者の幾人かは神学校への任命を受け入れることを拒絶した。シュタインシュナイダーが言うように、彼らの反発は神学校が「ユダヤ的学識の新しいゲットー」(Baron 1950, pp. 101-2)になるのではないかという懸念に起因した。しかし、この懸念はさらに大きなアイロニーに関わっている。ラビ神学校に対するユダヤ的学識の降伏は、宗教という私的あるいは家庭内の領域にユダヤ的アイデンティティを制限することだとはっきりわかったのである。ポスト啓蒙の世界のなかで、彼らの宗教を社会的行動に向かう包括的な導きではなく、私的な信仰告白とみなすために、ユダヤ人に対して強力な社会的圧力があつたのである。

このような宗教の私事化の予期された利点——多数派文化への急速な統合——は、すぐに具体化されなかった。実現されていない約束を補うために、ドイツ・ユダヤ人たちは周囲の社会における組織に似せたようなものを彼らの下位文化の内部で展開した。たとえば、ラビ神学校はより高次の学びの組織、つまり外見上は大学のようなものになり、そこでユダヤ人学

者たちは彼らの研究関心を追及することができた⁷。この点で神学校は一種のユダヤ的公共圏を創造し、そのなかにあった (Habermas 1989, p. 72)。同時に、神学校は逆説的な仕方でもユダヤ的アイデンティティの私事化を象徴した。なぜならその主要な使命の1つは、縮小していくドイツ・ユダヤ人の宗教的要求に対応するために新しい種類のラビたちを教育することであり、少なくとも部分的にはユダヤ教の近代ドイツ文化への適応を促進することだったからである。

公的次元と私的次元にまたがって生きること、職業的でより純粋な学術的機能、そして神学校は19世紀におけるユダヤ教学とドイツ・ユダヤ人のアイデンティティの中心にある緊張のいくつかを明らかにした。たしかにこの3つのものは、同じ仕方ですり出したのではなかった。事実、それぞれにはドイツ・ユダヤ教の両立しない解釈が存在し、またドイツ・ユダヤ教のなかにはさまざまな教派的傾向がある。プレスラウにおける最初の神学校は、「ユダヤ教の近年の悲惨な内部状況」(Brann 1904, Appendix 1: i/iii)からユダヤ人たちを救おうとする試みとしてあらわれた。終わりに近づくにつれて、神学校の創設者たちは、彼らの時代におけるユダヤ的宗教を表現する両極——一方ではユダヤ教に関するどんな歴史的問いや発展的展望も黙認しない窮屈な伝統主義と、他方では動的に進化するユダヤ教のモデルだけでなく、ユダヤ教の儀礼的实践における大規模な変化を支持した、ますます大胆になる改革派——を和解させる必要性を感じた。プレスラウの創設者たちは、伝統への恭しい態度を失うことがなく、また依然として歴史的分析の批判的モデルを統合した中道の立場を築こうとした。このような「実証的一歴史的」アプローチにもっとも精通した人々は、神学校の

⁷ 3つの神学校は、学生たちはドイツの大学において博士号へとつながる研究をはじめていることを強調した。それゆえ、とくに批判的・歴史的方法による専門的な学者の訓練は大学でも受けることができた。それにもかかわらず、学生がユダヤ教の文献と歴史に関する古典的典拠に広く深く接することを受入れたのは神学校のなかだけであった。

最初の校長であったザカリアス・フランケルとその最初のユダヤ教史の教授であったハインリヒ・グレーツ (Heinrich Graetz) だった。11 巻から成る彼のユダヤ人史は 19 世紀のユダヤ教の歴史書における偉大な業績の 1 つを代表している。

新しい実証的一歴史的運動の中心としてのプレスラウとともに、2 つの競合する組織がもう 1 つの宗教的・イデオロギー的見方を普及させるために、1870 年代のベルリンに設立された。ユダヤ教学高等学院はまさにその名前が意図しているように、ドイツの学術制度の高尚な基準を再現することを目的とした組織であった。けれども、それはまた改革派のラビ神学校の拠点でもあった。高等学院が、当時のもっとも優れた改革派のラビにして学者であった、晩年のアブラハム・ガイガー (Abraham Geiger) を雇ったのは偶然ではない。ガイガーの研究は、「厳格な律法主義」の時代から解放と啓蒙の時代へといたる発展のさまざまな局面を経験してきた、ここ最近における歴史的ユダヤ教のイメージを生み出した (Wiener 1962, p. 168)。隠すことなく進んでユダヤ教を批判的分析にさらそうとする彼の考えは高等学院に活気を与えた自由な探究の精神を示し、またユダヤ教神学と儀式における改革派的刷新を促した。

自由な探究と宗教的献身のあいだのバランスはドイツにおける 3 番目の主要なラビ神学校、すなわちラビ・エスリール・ヒルデスハイマー (Rabbi Esriel Hildesheimer) によって創設されたラビ神学校ではまったく異なっていた。ヒルデスハイマーによれば、その神学校のもっとも重要な目的は歴史的発展のなかでのユダヤ教の批判的評価ではなく、むしろ「聖書やタルムードの文献の知識」に基づいた「宗教的生活の向上」であった (Jahresbericht 1873-4, p. 59)。その学部はダーフィッド・ツヴィ・ホフマン (David Zvi Hoffmann)、アブラハム・ベルリーナー (Abraham Berliner) のような著名な正統派のラビにして学者、そして徹底的に律法を厳守した「トーラーの真理」(Torah-true) という学生組織を指導したヤーコブ・バルト (Jakob Barth) から成っていた。

それぞれのイデオロギー的な見方によって切り離されてはいたが、3 つ

の神学校は19世紀後半におけるドイツ・ユダヤ教の輪郭をはっきりさせようとする努力のなかで、競争相手としてあらわれた。結果的に、神学校におけるユダヤ教学の組織化はユダヤ教の一枚岩的な定義を生み出さなかったと判断を下すことができる。それにもかかわらず、神学校のあいだには共通の特徴があった。たとえば、神学校のカリキュラムは著しく類似しており、タルムードとラビの規則、聖書と中世の注釈、そしてヘブライ語とアラム語といった言語を重要視していた。しかし、さらにいっそう浸透していた共通性に注目しなければならない。評価の程度には違いがあったかもしれないが、3つすべての神学校における学者たちは学問への忠誠を告白したのである。イスマール・ショルシュは、正統派のラビ神学校においてさえ、学問的方法にしっかりとした根拠を与えた批判的・歴史的アプローチは「プレスラウあるいは高等学院に劣らず注意深く」適用されていたと認めた (Schorsch 1975, p. 11)。たしかにエスリール・ヒルデスハイマーは、神学校の学生たちはこのような科学的方法によく精通していた主張した (Ellenson and Jacobs 1988, p. 27)。学問は、ドイツのユダヤ人学者たち——改革派から正統派の両極にいたるまで——のあいだでのやり取り(と論争)に関するどこにでもある言語になっていた。このあちこちに存在する言語もまた、ドイツにおける学術世界の支配層に相対しているユダヤ人学者たちの広範囲に及ぶ苦境を示していた。ユダヤ人学者たちは彼ら自身の学術世界を持っていたけれども、不遇な大学教授にとどまっていた。正式な制度への受け入れを欠きながら、彼らは何度も自分たちの学問的優秀さを証明し、そして最高の社会的有効性を達成したいという希望のなかで学問へと向かった。

学問に対する信頼は、19世紀に浸透したユダヤ的学識における客観性の言説を支えた。同時に学問のもう1つの含意は学問的全体として、重大な変化を被った。フランケル、グレーツ、ガイガー、そしてホフマンのような人物の作品が協会世代の堂々たる視野と学識を取り戻したことはほとんど疑いえない。しかし、彼らが神学校で教えた人々は初期の世代の全体論、すなわちより広くドイツの歴史書を編纂したサークルとかなり類似してい

た展開を避けたのである (Iggers 1983, p. 131)。このようなより若い世代は大規模な総合ではなく、古典的な宗教テキストの校訂版のような、より小さな事業に専心した。ある評者の言葉を借りれば、19世紀後半にはユダヤ的学識は「細かい仕事」(Kleinarbeit)、きわめて控えめな範囲と狙いを持った研究になっていた (Elbogen 1922, p. 17)。

このような狭窄していく問題の焦点と密接に関係することで、世紀転換期までの一致した努力はユダヤ人学者たちに新しい方法論を紹介し、探究を文献学的・文学的分析における顕著な関心事を越えて、社会、経済、都市、そして法の歴史へと拡大することを可能にした。限定された焦点と方法論的広がりという2重の影響は、ユダヤ教学の組織的局面における新しい専門化(と断片化)を示している。

新しい専門的エートスがラビ神学校のなかで展開されたことは興味深い。新しい専門主義という1つの影響がユダヤ人の学問活動にとって役立つどんな機能をも否認することができたというのは、とくに興味深いように思われる。このような影響の証拠は、19世紀後半からベルリンにおけるユダヤ教学高等学院の教授であったジクムント・マイバウム (Sigmund Maybaum) から出てくる。1907年、マイバウムは次のように宣言した。

ユダヤ教学は、何よりもまずユダヤ的学問ではない。……その主体はみずからのユダヤ性の意識、あるいはそれとの関係をほとんど持つことなく対象と向かい合っているので、われわれはユダヤ的学問あるいはユダヤ的芸術について語ることはできない。反対に、きわめて多くのことが対象に依存しすぎているので、ユダヤ教学は非ユダヤ人たちによって育成され、推進されている (Maybaum 1907, p. 643)。

これらの見解は科学としての、そしてユダヤ人の自己定義の行為者としての学問の2重の機能がもはや共存できないという新しい意識を反映している。直観的にこれら2つの特徴を認識したことで、マイバウムはそれを解決しようとした。彼の見方によれば、学識は神学校においてさえ、教派

における党派心の道具としては役立ちえなかった。ユダヤ教学は、ユダヤ人と同じように正当に非ユダヤ人の領域として、純粋に学術的な追求でありえたのである。

19世紀中葉にはじまったユダヤ教学の組織的側面は、ユダヤ的学識の高まりつつある特殊化、断片化、そして方法論的拡大によって特徴づけられた。20世紀初頭には、何人かの重要なユダヤ人思想家たちはこれらのプロセスの不完全さに注意を促しはじめていた。彼らのなかでもっとも優れた者は歴史家でも文献学者でもなく、むしろ歴史的方法の使用と乱用に関する深い懸念を持っていた哲学者、すなわちヘルマン・コーエン(Hermann Cohen)とフランツ・ローゼンツヴァイク(Franz Rosenzweig)であった。この2人の思想家は、彼らの時代におけるユダヤ教学の客観的で距離をおいた性質に幻滅を感じていた。たとえば、コーエンはジクムント・マイバウムとは完全に対立する立場を取っていた。ユダヤ教の研究は「内的な敬虔さを持ってユダヤ教に連なっている者によってのみ学問的に扱われ」うると、1907年に彼は主張した(Cohen 1907, p. 12)。彼の目的は、ユダヤ人学者たちをその学問的関心と霊的関心のあいだの密接な同盟を再確立することへと促していくことであった。ベルリンの高等学院でのコーエンのかつての学生であったフランツ・ローゼンツヴァイクは、このような志を共有した。1917年、ローゼンツヴァイクはコーエンに長い手紙を認め、そのなかで彼はベルリンにユダヤ教学アカデミーを創設することを求めた。この組織は150人の教師にして学者の専門家集団を雇用し、彼らは純粋な研究と共同の奉仕のあいだで自分たちの時間を分け合おうとした(Rosenzweig 1918, pp. 23-4)。

ローゼンツヴァイクの提案は、コーエンが最初にユダヤ的学識に向けて表明した同じ不満感から生まれた。この2人の人間は、ユダヤ教学における学術的追求と霊的関心のあいだのつながりを意識的に認めることを支持した。そのような認識を通してのみ、ユダヤ的学識の完全なる建設的潜在力がユダヤ教の活ける力として実現されうると、彼らは信じた。彼らの要

求は、ユダヤ的学識の手段的価値——単に挿話的に明確な仕方ですべられたにもかかわらず、19世紀初頭の協会の時代から示されてきた価値——という非弁証学的な認識に向けられていた。

コーエンとローゼンツヴァイクがユダヤ的学識の低迷のために提示した対応策は、ユダヤ教学アカデミーであり、それは公式には1919年に設立された。きわめて急速にこの組織は、コーエンあるいはローゼンツヴァイクが想像したものとはまったく異なる方向を取る事となった。また、それは純粋な学問研究の組織になった(Myers 1992, p. 121)。このような逆説的な展開(偶然にもそれは科学としての学問の耐久力を証明している)にもかかわらず、コーエンとローゼンツヴァイクの非難はユダヤ的学識の世紀にふさわしい頂点としての役割を果たした。協会の世代と同様に、彼らは自分たちの時代におけるユダヤ教の運命に関するある切望、すなわち生き活きとした全体論的なユダヤ教学を通して改善されればと彼らが願った切望を感じていた。しかし、研究者の第1世代とは異なり、コーエンやローゼンツヴァイクもまたユダヤ教を文脈化し、彼らの考えではユダヤ教を細分化した歴史的方法に対する反感も感じていた。この世紀のもう1人の著名なユダヤ人学者であったサロ・バロン(Salo Baron)に、ユダヤ教学は「19世紀のもっとも豊かなユダヤ運動」であると言わせたのは、まさにこのようなユダヤ教の歴史化(historicization of Judaism)であった(Baron 1937, p. 218)。

ある点では、これら2つの対立する見方は幾分の真実を担っている。一方でコーエンとローゼンツヴァイクの両者、他方でバロンは19世紀におけるユダヤ人学者たちは異なる主人への忠誠を抱いていたと理解した。ユダヤ教を再定義し復活させようとする事への傾倒と科学的学問への服従のあいだで分断されながら、学者たちは学問の領域に避難した。彼らの重要性は少数の人だけが知っているような学識の年代記に限られていない。なぜなら彼らは遠心的な推進力と求心的な推進力、内部の霊的実現と外部の社会的有効性のあいだにある緊張を具体化しており、その緊張が近代のドイツ・ユダヤ人一般の複雑な歴史的経験を形成していたからである。

参考文献一覧

1 次文献

- Allgemeine deutsche Real-Encyclopaedia für die gebildeten Stände* (1820)
(Leipzig, vol. 10).
- Brann, M. (1904) *Geschichte des Jüdisch-Theologisches Seminar* (Fraenckel'sche Stiftung (Breslau: Schatzky).
- Cohen, H. (1907) "Zwei Vorschläge zur Sicherung unseres Fortbestands," *Bericht der Grossloge für Deutschland U. O. B. B.: Festgabe* (1882-1907) 2 (March): 9-12.
- Elbogen, I. (1922) *Ein Jahrhundert Wissenschaft des Judentums* (Berlin: Philo).
- Graetz, H. (1853-76) *Geschichte der Juden von dem ältesten Zeiten bis auf die Gegenwart* (Leipzig: Leinier).
- Jahresbericht des Rabbiner-Seminars für das orthodoxe Judenthum pro 5634* (1873-4), 1.
- Maybaum, S. (1907) "Die Wissenschaft des Judentums," *Monatsschrift für Geschichte und Wissenschaft des Judentums* 51: 654-8.
- Rosenzweig, F. (1918) *Zeits ists: Gedanken über das jüdische Bildungsproblem des Augenblicks an Hermann Cohen* (Berlin: Neues Jüdisches Monatsheft).
- Wolf, I. (1822) "über den Begriff einer Wissenschaft des Judentums," *Zeitschrift für die Wissenschaft des Judentums* 1: 1ff.
- Zunz, L. (1875) "Etwas über die rabbinische Literature," *Gesammelte Schriften*, Vol. 1 (Berlin: L. Gerschel).

2 次文献

- Baron, S. W. (1937) *A Social and Religious History of the Jews*, vol. 2 (New York: Columbia University Press).
- (1950) "Moritz Steinschneider's Contributions to Jewish Historiography," in *Alexander Marx Jubilee Volume* (New York: Jewish Theological Seminary).
- Ellenson, D. and R. Jacobs (1988) "Scholarship and Faith: Rabbi David Zvi Hoffmann and his Relationship to *Wissenschaft des Judentums*," *Modern*

Judaism 8. 1: 27-40.

- Gadamer, H.-G. (1979) "The Problem of Historical Consciousness," in *Interpretive Social Science*, edited by P. Rabinow and W. M. Sullivan (Berkeley: University of California Press).
- Habermas, J. (1989) *The Structural Transformation of the Public Sphere*, translated by T. Burger (Cambridge, MA: MIT Press).
- Iggers, G. G. (1983) *The German Conception of History: The National Tradition of Historical Thought from Herder to the Present* (Middletown: Wesleyan University Press).
- Mendes-Flohr, P. and J. Reinhartz (eds) (1980) *The Jew in the Modern World* (New York: Oxford University Press).
- Meyer, M. A. (1967) *The Origins of the Modern Jew* (Detroit: Wayne State University Press).
- Myers, D. N. (1992) "The Fall and Rise of Jewish Historicism: The Evolution of the Akademie für die Wissenschaft des Judentums (1919-1934)," *Hebrew Union College Annual* 63: 107-44.
- Reissner, H. G. (1965) *Eduard Gans: Ein Leben im Vormärz* (Tübingen: Mohr (Paul Siebeck)).
- Scholem, G. (1979) "Mi-tokh hirhurim 'al Chokhmat Yisrael," in *Chokhmat Yisrael: heiybetim historyim u-filosofim*, edited by P. Mendes-Flohr (Jerusalem: Shazar Center).
- Schorsch, I. (1975) "Ideology and History in the Age of Emancipation," in *Heinrich Graetz: The Structure of Jewish History and Other Essays*, edited by I. Schorsch (New York: Jewish Theological Seminary), pp. 1-62.
- (1977) "From Wolfenbüttel to Wissenschaft: The Divergent Paths of Isaak Marcus Jost and Leopold Zunz," *Leo Baeck Institute Year Book* 22: 109-28.
- Sorkin, D. (1988) *The Transformation of German Jewry, 1780-1840* (New York: Oxford University Press).
- Stanislawski, M. (1988) *For Whom Do I Toil?: Judah Leib Gordon and the Crisis of Russian Jewry* (New York: Oxford University Press).
- Ucko, S. (1967) "Geistesgeschichtliche Grundlagen der Wissenschaft des Judentums," in *Wissenschaft des Judentums in deutschen Sprachbereich: Ein Querschnitt*, edited by K. Wilhelm, vol. 1 (Tübingen: Mohr (Paul

Siebeck)).

Wallach, L. (1959) *Liberty and Letters: The Thoughts of Leopold Zunz* (London: East and West Library).

Wiener, M. (ed.) (1962) *Abraham Geiger and Liberal Judaism: The Challenge of the Nineteenth Century* (Philadelphia: Jewish Publication Society).

*ここに訳出した論文は、平成25年度北海学園学術研究助成(一般研究)の研究成果の1部である。